

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

南部ペルーのアンデス西斜面における環境利用

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大貫, 良夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004531

南部ペルーのアンデス西斜面における環境利用

大 貫 良 夫*

Environmental Exploitation of the Western Slope of the Andes of Southern Peru

Yoshio ONUKI

The higher elevations of the western slope of the Andes of southern Peru support vast tracts of *puna* and the lower levels are characterized by a gigantic plateau. Rivers cross the plateau in deep gorges, which inhibits the formation of extensive alluvial plains downstream. This, in turn, is a major factor that accounts for the lack of strong societies with large populations along the littoral of southern Peru. At the same time, the absence of a strong coastal society enabled the highlanders to manage effectively an archipelagic vertical control as modeled by Murra [1972].

Today, the dominant type of vertical control on the western slope is the specialized one [ONUKE 1978]. Each of the three well-defined ecological zones is occupied by people specialized in its exploitation. Most probably there existed formerly a close, interdependent relationship among the three ecological zones, which were linked through trading and barter networks.

Wool industries appeared in the *puna* in the latter half of the 19th century, and the advance of truck transportation in the middle of the 20th century accelerated the alienation of the *puna* herders from the traditionally interdependent, inter-zonal networks. In the *kichwa* zone, on the other hand, the milk industry established in 1950s led *kichwa* farmers, especially to the south of Arequipa, to convert from subsistence pursuits to commercial milk and pastoral production. Economic changes both in the *puna* and *kichwa* facilitated the breakdown of the traditionally interdependent network and the inhabitants of both zones became market-oriented. The *yunga* zone had already dropped-out, probably in the colonial period, from the system of interdependence. Now the system of

* 東京大学教養学部・国立民族学博物館企画委員

vertical control is found only in extremely remote places, such as the headwaters of the western slope.

But no ecological zone can be self-sufficient, and subsistence requirements must be satisfied through a system of exchange. This can no longer be called vertical control since Andean vertical control is a system of exploitation of multiple ecological zones in which exchange is carried out according to the conventional rate, which differs from that of the market. This conventional rate is based on reciprocity which generally underpins all kinds of social, economic, and ritual behavior in the Andes. The true nature of Andean vertical control, therefore, should be sought in the local concept of reciprocity.

I. はじめに	3. Arequipa 県 Chuquibamba 谷
II. 調査地域の概要	4. Arequipa 県 Cotahuasi 谷
III. 調査経路	5. Moquegua 県 Puquina-Omate
IV. 南ペルー西斜面の環境区分	6. Moquegua 県 Moquegua 谷
V. 環境利用の諸形態	VI. プーナの牧民
1. Apurímac 県 Chalhuanca 谷	VII. アンデス西斜面の環境利用の類型と歴史
2. Ayacucho 県 Parinacochas 郡	VIII. 結 論

I. は じ め に

中央アンデス高地の人間生活は、およそ 2,000 m から 3,000 m の高度差のなかに展開されてきた。この大きな高度差は、当然のことながら、高度によって自然環境の性格が異なることを意味し、人間の側からする自然へのはたらきかけも、それら高度に応じて異なる自然条件にあわせて、さまざまな異同をみせている。たしかに、海拔 4,000 m を越える高地では、ラクダ科動物やヒツジなどの飼育以外ほとんど他に有効な食料生産の活動がみられず、一方 2,000 m 前後の谷あいには、バナナ、オレンジ、パパイヤなど暖地産の果樹をはじめ、多種類の農作物が植えられ、農業が最も重要な生業になっている。これらのことは、ペルーの高地を一度でも旅行すれば、まず最初に目に入ってくる現象であり、高度差に対応した自然ならびに人間生活の鮮やかな差異は、きわめて印象的である。

こうして、高度差はそれに応じた自然資源の差を生み、それら異なる自然資源の利用に基づく人間の生業形態を生んだ。そして、それらの生業形態が相互に結びあわさ

れてアンデス高地の生活が成り立っており、その結合の方式に注目して最近のアンデス高地の文化生態学の研究が進められてきた。そのような研究動向の直接的契機となったのは Murra の論文 [MURRA 1972] で、以後多くの研究が発表され、そのいくつかは筆者も以前紹介したことがある [大貫 1978]。

従来の研究は、アンデス高地でもどちらかという分水嶺の東側に重点が置かれていた。Murra は16世紀の事例のなかに、チチカカ湖岸の民族がアンデス西斜面の谷間までを利用する、非常に広範囲な活動を営むものがあったことを記しているが、最近南ペルーのアレキパ県高地の研究論文集が編まれ [PEASE (ed). 1977]、現在でも南高地の牧畜民が太平洋沿岸にまで下りて採集や交易活動を行なうことが紹介され、西斜面の研究の必要性も大きくなった。西斜面の高地と海岸との交流については、すでに先史時代から両者の関係があったわけで、まとめの部分で多少その点について触れることにするが、ナスカ谷より南の地域に関しては、ほとんど研究が成されておらず、いわば未開拓の領域である。

そこで、以下において、南ペルーのアンデス西斜面で試みた調査をもとに、観察事実と問題を整理してみようと思う。なお本調査は、昭和53年度文部省科学研究費による海外調査「中央アンデス農牧社会の民族学的研究——海岸・高地・熱帯低地地域間の動態的社會関係」(研究代表者増田昭三)の一環として行なったものである。

Ⅱ．調査地域の概要

アンデス山脈は、ペルー南部のパラカス半島をすぎると、その幅を急に増し、チリ領とアルゼンチン領にまたがるに至ってふたたび幅を減じる。この幅の増大は、太平洋沿岸部に広大な形でひろがる台地を形成させている。その台地は、海拔 3,000 m 前後の高さをもち、アンデス山脈の分水嶺の西に平坦に伸び、太平洋へ急峻な断崖となって落ち込んでいる。したがって、海岸部の地形は、ナスカ谷以北と、それより南とは大きなちがいをみせる。特にそのちがいは、河川の形にはっきりと出ている。

すなわち、ペルー北部のランバイェケ谷から南のナスカ谷までの地方では、アンデス山脈に端を発して太平洋に注ぐ諸河川は、上流部において深い峡谷を刻んで斜面を流れ下り、中流部から下流部にかけて、谷底に沖積平野を作り、しばしば下流部には扇形にひろがる平野を形成している。これに対してナスカ谷の南にあるアカリー谷をはじめそれより南では、高い台地が海岸にまで張り出してきているために、河川は上流から河口にまで、幅をやや変化させつつも、ほとんど峡谷のままの形で流れるのである。

幅の広がったアンデス山脈は、南ペルーに広大なプーナ地帯を作り出している。すなわち、海拔 4,000 m を越える部分が非常に大きく、それだけ降雨量も大きくなっている。その結果、南ペルーのアンデス山脈に源をもつ河川の水量は一般的に言って大きい。南ペルー最大のアプリマック川の水量は有名であるが、太平洋側に流れる川も、雨期のときはほとんど川幅いっぱいにあふれる。このため、峡谷の形をとる河川の谷底は、あまり使いものにならない。特にオコーニャ谷とかマヘス（カマナ）谷など大きな川の場合、中流部から下流部の谷底はほとんど利用されていない。小規模の耕地は開発されているが、川底の広大なひろがりには比べれば実に小さなものである。ナスカ谷の北のイカ谷、それより北のチンチャ谷の沖積平野とそこに展開する耕地の広さとはまさに好対照であり、そのような平野を流れる川、すなわちイカ川やチンチャ川は、逆に水流の幅が極端にせまい。上流の方で灌漑用に水をとるためであろうが、下流まで流れてくる水はごくわずかなのである。こうして南ペルーの河川は、峡谷のゆえに谷底平野がなく、下流部ではあまり利用されないまま水が海に流れてしまう。そこで近年ペルー政府は、この水を台地の上にあげて、峡谷の外にひろがる広大な砂漠を畑に変えようと計画している。すでにタンボ川下流で砂漠の一部が緑野となり、マヘス川下方の台地でもマヘス計画として大規模な開発が行なわれつつある。

谷の狭さと深さに対して、高地は無辺のひろがりとなだらかな起伏の連続である。けわしい雪山ははるか東方の端に退き、南ペルーの高地は広い草地のプーナ地帯となり、農耕には不適でも、家畜飼育には都合がよい。ラクダ科動物の飼育は南ペルーで最もさかんである。特に湿地を好むアルパカの飼育は、南ペルー独特の生業であり産業である。16世紀以後、ウシとヒツジが加わったが、リャマとアルパカの適応性は高く、南ペルー高地の主要な家畜としての地位を失っていない。そしてそれら家畜飼育を専業とする人びと、すなわち牧民 (pastores) が多くいる。最近になってこの牧民の民族学的研究が活発に行なわれはじめているが、南ペルー高地の文化生態学にとって、東斜面であれ西斜面であれ、牧民はきわめて重要な存在である。

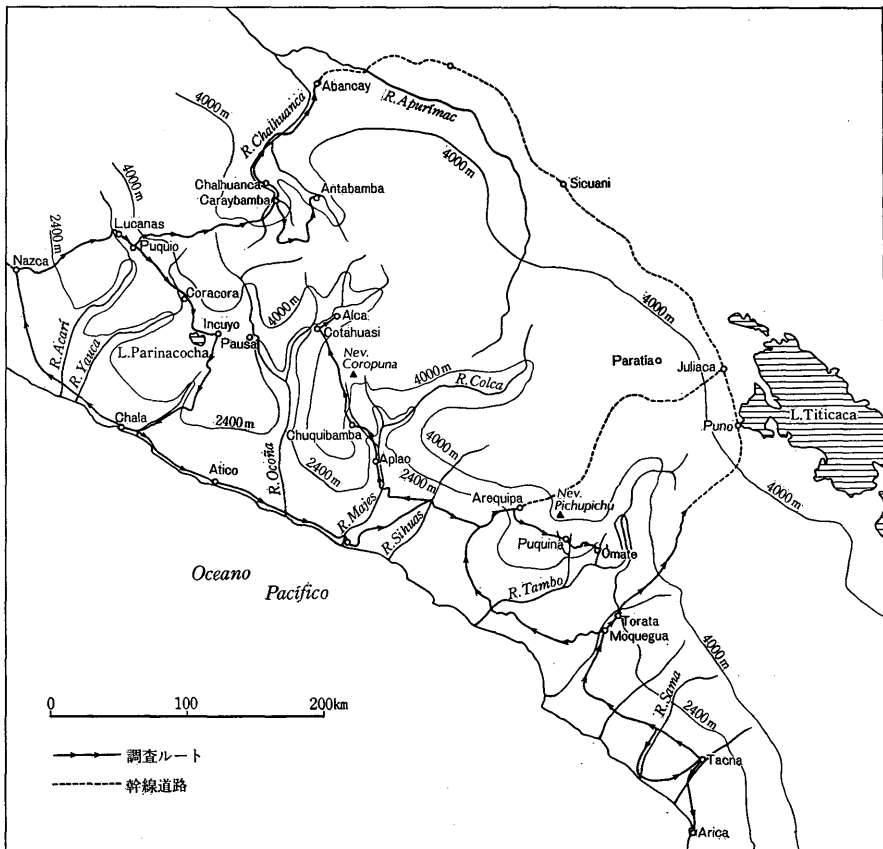
この広大な高地のなかで河川が深い谷を刻む。そして上流部の谷間や斜面で農業が営まれる。河川の下流部はほとんど使えないが、まだ水量の少ない上流部の諸支流域では、ある程度の谷底平野があり、それに続く緩傾斜の斜面も農地に利用される。そして標高の高い斜面にも農地が開かれる。

南ペルーのアンデス西斜面では、アンデス山脈の分水嶺から西へ台地が張り出し、太平洋岸で断崖を作る。河川は深い峡谷のまま海に注ぎ、下流平野を形成しない。それゆえに海岸地帯に大きな都市も発達しなかった。アレキパやモケグア、タクナな

どの都市は、植民地時代になってから発達した。台地は海拔 2,000 m から 3,000 m の高さで太平洋岸に連なり、砂漠もしくは半砂漠の景観を呈する。諸河川の上流部に至ってはじめて、谷底や斜面を農地として利用できるようになる。また、台地は東の方へゆくにつれて徐々に高度を増し、海拔 4,000 m のあたりから起伏の多い草地となつて、家畜飼育が可能になる。この上流部の農業と高原の牧畜とが結びついて、ペルー高地に一般的なシエラ的生活様式ができあがる。但し、牧畜の重要さと、それに従事する人口の大きさは、ペルーの他の高地とは異なつた、南ペルーの特徴である。

Ⅲ. 調査経路

今回の調査は、1978年8月末より11月初めまでのおよそ2カ月間であつた。南ペルーの西斜面については、民族学的にも先史的にも資料は皆無に近く、南ペルー西斜



面という地域概念を把握するために、広範囲を見てまわる必要があった。そこで筆者は特定の地域に定着し集中的な調査をするのではなく、できるだけ広く歩きまわるなかで、南ペルーの一般的特色をつかみ出す仕事を担当した。したがって、各地での滞在は1日から3日くらいという短い時間となり、得られる情報には限りがあり、きわめて表面的なものとなったのはやむをえない。しかしながら、乏しい見聞とはいえ、実際に南ペルーを歩き、現地の人びとに接することはやはり貴重な経験というべきで、南ペルーの西斜面の自然環境と生活の関係について、概略的な展望を得ることができた。調査経路については、図1の概念図に示す通りである。

Ⅳ． 南ペルー西斜面の環境区分

地形上の特徴は、ペルーの北海岸や中央海岸と異なるとはいえ、ペルー南部西斜面の生態学的条件は、特に環境区分帯としてみた場合、ペルーの他の地域と共通する。すなわち海岸地帯は砂漠であり、河川の流域下流部から中流部はユンガであり、上流部の谷間はキチュワとなる。そして海拔4,000 m以上の高原は、プーナとしての諸条件をもつ。本稿ではPulgar Vidal [1946]の用法に依拠して環境区分を設ける。その大要については別稿で紹介した[大貫 1978]が、表1のごとくである。なおユンガについて、Pulgar Vidalは海岸ユンガと山間ユンガを区別している。そして海岸ユンガはアンデス西斜面の海拔500 mから2,300 mまでのところに分布するとしている。南ペルー西斜面の場合、諸河川の下流にはもちろん海岸ユンガが見出せるが、かなり上流に入ったところにもある。定義的には海岸ユンガといえるのであるが、近くにはキチュワ地帯があって、さらにプーナ地帯との関係の強かった歴史があって、ペルーの他の地域の山間ユンガと共通する点が多い。そうした河谷中流ないし上流のユンガは、南ペルーにあっては、河谷下流につながるものではなく、むしろ高地につながっているのである。この点は、南ペルー西斜面独特といってよい。

表1 アンデス高地の環境区分

海 抜	名 称	主 た る 特 徴
5,000 m	プーナ (Puna)	起伏の多いなだらかな草原。寒冷。雨量 1,000 mm 以上。 植 物：チャンパ (<i>Distichia muscoides</i>) イ チ ュ (<i>Stipa ichu</i>) 作 物：ジャガイモ、オオムギ 家 畜：リ ャ マ (<i>Lama glama glama</i>) アルパカ (<i>Lama pacos</i>) ヒツジ

4,000 m	スーニ (Suni)	谷の源頭；斜面上部；なだらかな起伏地。寒冷。 雨量 1,000 mm 以上。 植 物：タ ヤ (<i>Lepidophyllum</i> sp.) キシアル (<i>Polylepis racemosa</i>) キシワル (<i>Buddleja</i> sp.) イチュ 作 物：マシュワ (<i>Tropaeolum tuberosum</i>) キノア (<i>Chenopodium quinoa</i>) カニワ (<i>Chenopodium canihua</i>) オユコ (<i>Ullucus tuberosus</i>) ジャガイモ, ソラマメ, オオムギ, オカ (<i>Oxalis tuberosa</i>)
3,500 m	キチュワ (Kichwa) (または Quechua)	谷上流部；山の斜面。温暖だが霜もある。雨量 1,000 mm 以下。 植 物：レタマ (<i>Cassia</i> sp.), モリエ (<i>Schinus molle</i>), マゲイ (<i>Agave americana</i>), ユーカリ, サボテン 作 物：トウモロコシ, コムギ, ジャガイモ, ソラマメ, その他野菜類 果 樹：イチヂク, ブドウ, アンズ, モモ 家 畜：牛, 馬, ロバ, ラバ, ヒツジ, ヤギなど
2,300 m	ユンガ (Yunga)	山の斜面下部；谷底。温暖, 乾燥。雨量 1,000 m 以下。 植 物：マゲイ, サボテン, モリエ, ユーカリ, ヤナギ 作 物：トウモロコシ, サトウキビ, サツマイモ, コメ, その他 果 樹：パパイヤ, チリモヤ (<i>Annona cherimolia</i>), ルクマ (<i>Lucuma obovata</i>), パカエ (<i>Inga feuillet</i>), アボカド (<i>Persea americana</i>), ブドウ, オレンジ, その他
1,000 m		

(1) ユンガのうち, 海岸ユンガは, 海拔 500 m から 2,300 m まで。

(2) 動植物学名は, [PULGAR VIDAL 1946] と [SOUKUP 1970] に依る。

V. 環境利用の諸形態

1. Apurímac 県 Chalhuanca 谷

チャルワンカ (Chalhuanca) 谷は, アプリマック県とアヤクチョ県の境となるプーナ地帯に端を発し, 途中南からアンタバンバ (Antabamba) 谷を迎え入れ, アプリマック県の首都アバンカイ (Abancay) の南側を通してアプリマック川に合流する。このチャルワンカ谷とその南側の山地をひとつにしてここで検討する。その山地は主としてプーナ地帯と雪山から成るが, コタワシ (Cotahuasi) 谷方面にもつながり, チャルワンカ谷はアンデス分水嶺の東側に位置しつつも, 西斜面との交渉がみられるところである。

南海岸のナスカを出てアンデス山脈の西斜面を登る自動車道は, プキオ (Puquio)

からアバンカイを経てクスコに通じ、南ペルーの最も重要な幹線道路のひとつである。ナスカからおよそ 80 km, 約 3 時間の急な登りを続けると、海拔 3,600 m に達し、それまでの乾ききった荒地の山に草地がみえはじめ、ヒツジの放牧がみられるようになる。そして 3,800 m あたりからプーナ地帯に特徴的なイチュという草が多くなり、それとともにプーナの野生動物の代表ともいえるラクダ科のビクーニャが姿を現わす。山はすでになだらかな起伏の高原に変る。この平坦ともいえるプーナ地帯のまんなかにはプンタ・ガレーラ (Punta Galera) があり、そこには、ビクーニャの保護と繁殖にあたるペルー・ドイツ合同の事業所がある。ここをすぎると道は下りになり、ナスカより 143 km, 時間にしておよそ 5 時間でルカナス (Lucanas) の村に着く。海拔 3,375 m のこの村はせまい谷間にあり、両側の山の斜面下部を畑にしている。

この村の東側、谷の左岸側の山上にプラプク (Purapucu) という遺跡がある。粗石や整形した石の建物があり、その積み方をはじめ、表面に落ちている土器片の幾何学文は、明らかにインカ様式である。保存良好の建物のひとつは、自然の山の斜面を奥壁に利用したもので、内部の幅約 2 m, 長さ 4 m の長方形を呈し、長辺の中央に幅 1 m 程の入口があいている。内部の天井高は約 2 m, 石壁の厚さは 1 m と厚い。天井には長さ 2 m 以上の大石を渡している。このような建物のほかに、周囲には長方形、方形、円形の、粗石積の建物が密に分布している。長方形の建物は、墓室ともみえるが、その他は住居の跡と考えられる。

ルカナスを出て谷沿いに下って少し行くとプキオの町である。海拔 3,200 m, 比較的平坦な土地にかこまれた町で、周囲は牛の牧場となっている。プキオを出て約 1 時間半、海拔 4,350 m に達するとまさに広大無辺のプーナの草原である。およそ 2 時間このプーナ地帯を横切ったのちにチャルワンカ谷への下りとなる。プキオやルカナスのある谷間は、アカリー (Acari) 谷の源流部分であるから、プキオをすぎてチャルワンカに向かって横切るプーナ地帯がこの部分のアンデス山脈の分水嶺となる。下り道になって 4,000 m から 3,800 m あたりのところには、イチュで屋根を葺いた、粗末な石造りの家が点在し、その家の周囲には、石積みの囲いがある。これらは、エスタンシア (estancia) とよばれ、リャマやアルパカの飼育を営む牧民の住居である。ここを過ぎて谷間に入ると、海拔 3,400 m あたりから、谷の両側の斜面下部に整然とした階段畑がみえはじめ、灌木類やユーカリの木が姿を現わす。そしてコタルセ (Cotaruse), カライバンバ (Caraybamba) などの村が形成され、やがて海拔 2,900 m のチャルワンカの町に着く。

チャルワンカは、南海岸のナスカからクスコへ通ずる幹線道路に面し、バスやトラ

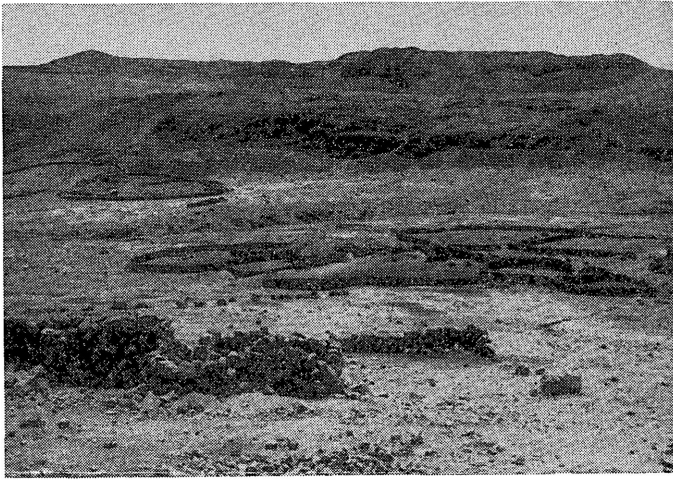


写真1 プーナの牧民のエスタンシア

ックの中継地として商業活動がさかんである。しかし住民の少なくとも半分は農民で、幅のせまい河岸段丘と、その背後の急峻な山腹に畑を作る。チャルワンカの農業はトウモロコシ、ジャガイモ、オオムギ、コムギ、ソラマメを主作物とし、ほとんどが自家用で、換金するのは、ごく少量にすぎない。チャルワンカの人びとは、山の上のプーナを直接利用することがない。プーナには牧民がいて、チャルワンカとはまったくべつのカテゴリーに入るものとされている。もちろん通婚関係はない。牧民たちは必要に応じてチャルワンカに下りてきて、砂糖や塩を買う。そのときチャルキという乾燥肉やアルパカの毛など、プーナの特産物をもってくる。かつては、牧民とチャルワンカの住民との間には物々交換が行なわれたであろうが、現在はほとんど貨幣を媒介とした交換である。チャルワンカにはアルパカの毛を扱う大きな商社の支店があり、プーナ地帯で毛を集め、チャルワンカにそれを集積したあと、トラックでプーノ(Puno)に運び、そこからおそらくアレキーバ経由で国際市場へと出している。したがって、牧民はプーナ地帯ですでに貨幣を入手しているのである。

チャルワンカの少し南にカライバンパの村がある。この村は同名の小さな谷間に少し入ったところにあるが、谷の両側に天にもとどかんばかりに続く階段畑は壮観である。その階段畑は海拔 3,800 m あたりまであり、下限は 3,200 ないし 3,100 m あたりにある。畑はほとんどキチュワ地帯に位置するが、上端はスーニ地帯に入る。そしてこの部分に大きな遺跡があり、カライバンパをくわしく調査した友枝によると、かつてはそこに住んでいたという伝承が残っているという。チャルワンカやカライバンパは、キチュワ=スーニ地帯の農業を経済的基盤にしているが、古くはその上端に居



写真2 カライバンバの階段畑

を構えて、それより下方の畑を運営していたものかもしれない。そうなるとプーナ地帯は目の前であり、プーナの利用にも便利がよかったであろう。たとえプーナは牧民の土地であったとしても、その牧民との相互依存の関係は今日よりはるかに密接であったにちがいない。

カライバンバの谷を源までつめると起伏の多いプーナ地帯になる。そしてモリエバンバ (Mollebamba) の村へ下り、ふたたび高い山を越えてアンタバンバに着く。カライバンバからおよそ 100 km の道のりであるが、5 時間を要する難路である。それだけ起伏がはげしい山地といえるが、この自動車道より少し南の方とか、アンタバンバの東の方にはもっとなだらかなプーナ地帯がひろがり、牧民のエスタンシアが点在するようである。アンタバンバは、山奥にある町にしては大きくかつ近代的で、家屋の屋根は赤瓦のものがほとんどで、大きな学校や立派な教会、毎日開くわけではないが劇場兼映画館もある。住民はメスティーソが主体で、多くはプーナ地帯や村の近くで牛を飼っている。裕福な牛飼いはリマに家をもち、そこへ子供達を送って教育させたりしている。アンタバンバの町の上方の山の斜面には小さな農民の家が散在し、ジャガイモの栽培と家畜（リャマや牛）の飼育を細々と行なっている。アンタバンバは海拔約 3,600 m にあって、キチュワ地帯の上限である。そして町の下の海拔約 3,200 m の谷底から 4,100 m 程の高さまでにわたって、急峻な斜面が畑や牧場になっている。アンタバンバの牛は近隣ではなく、遠くアレキパとカリマなどの海岸低地の大都市に売られるものであり、アンタバンバは周囲の村や町を一足とびに越えて、経済的にも文化的にも都市により強く結びついている。

さてチャルワンカ谷にもどりさらに下ってゆくと、海拔 2,400 m あたりから周囲の植物景観が少しちがってくる。それまで多くあったモリュ (*Schinus molle*)、マゲイ (*Agave americana*)、レタマ (*Cassia* sp.) などのほかに、ルクマ (*Lucuma obovata*) やチリモヤ (*Annona cherimolia*)、パパイヤ、オレンジなどの果樹がみえはじめ、空気は暖かくなり、乾燥が強まる。つまりキチュワ地帯からユンガ地帯に移るのである。そしてこのユンガ地帯はさらに下方のアバンカイまで続く。アバンカイ周辺の農業地帯は、現在やや衰えてはいるがサトウキビはじめ、果樹、トウモロコシなどを産し、多くは自家用というよりも換金作物であり、10年程前までは大規模なアシエンダ経営のみられたところである。

以上の観察をもとに、チャルワンカ谷を中心にしてやや広い地域を図式的にとらえるとすれば、その環境利用の形は、表 2 のようにまとめることができる。すなわち、まず高いところにあるプーナ地帯には、牧民がいてリヤマとアルパカの飼育を行なう。またプーナの一部は牛の飼育にも用いられる。牧民の産するアルパカの毛は、ほとんどがプーナに拠点をもつ獣毛業者が買いとってしまう。また、牛はメスティーンズの牛飼いによって大都会に売りさばかれる。こうして、プーナ地帯は近隣の農村よりも、遠いところに中枢をもつ国家経済や国際経済と結びついた形になる。しかしながら、

表 2 チャルワンカ谷の環境利用

海 抜	環 境	生 業 と 経 済	主たる集落	環 境 利 用
5,000 m	プーナ	牧畜(1): アルパカ, リヤマ	エスタンシアに分散	↑ ↓ ↑ ↓ 交換
4,000 m		牧畜(2): ウシ		
3,500 m	スーニ	農業と牧畜 (ジャガイモ, リヤマ, ウシ) 農 業: ジャガイモ, オオムギ, ソラマメ	△ アンタバンバ	↑ ↓ 交換
	キチュワ	農 業: トウモロコシ 商 業	カライバンバ モリュバンバ チャルワンカ	
2,800 m	キチュワ		無 人	
2,400 m				
1,000 m	ユンガ	農 業: トウモロコシ, サトウキビ等の他, すべて換金作物	アバンカイ	↑ ↓

△: 遺 跡

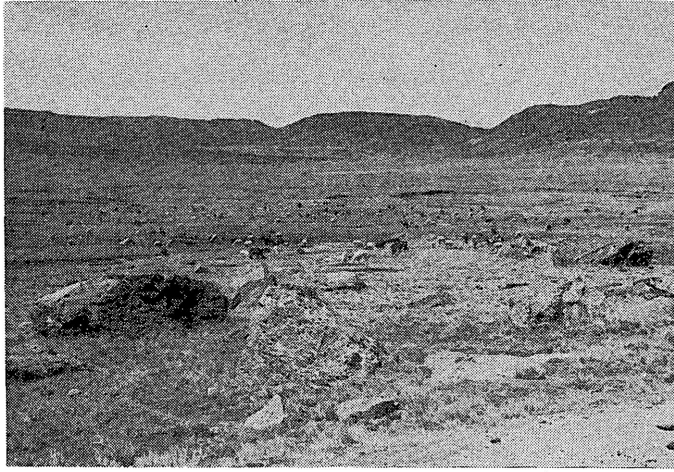


写真3 プーナのアルパカ放牧

近隣の農村との伝統的な関係が必ずしも絶たれてはいないようで、その点についてはカライバンバなどのくわしい調査が明らかにすることであろう。

キチュワ地帯の住民は各所に村落を構え、その上下の斜面を耕作する。キチュワ上部からスーニ地帯でジャガイモやムギ類、ソラマメなどを、下の方で主としてトウモロコシを作る。この地帯でモリエバンバは特異な存在で、将来の研究にとって興味深い。まず、住居がほとんどすべて草葺き屋根で、他の赤瓦やトタンの屋根の多い集落とは異なる。そして住民のほとんどがインディオで、ケチュア語が優勢で、スペイン語が通じにくい。女性の服装は典型的なインディオ様式である。アンタバンバ、カライバンバ、チャルワンカなどメスティーソが主体の村や町にくらべて、きわめて伝統的な色彩が濃いといえる。時間の都合でモリエバンバに立寄れなかったのは遺憾であったが、くわしい調査を試みる価値がありそうである。

ユンガ地帯は最近までアシエンダ経営の行なわれていたところで、サトウキビの植付けと砂糖の生産がさかんであったが、10年前の農業改革で個人経営や組合経営になってからは活動が大幅に低下した。それでもユンガ地帯の農業は国家経済(市場経済)の一環であるという性格は変わっていない。

アンデス高地の環境利用は、同一エスニック・グループが異なる生態学的ゾーンを複合的に利用する方式か、異なるエスニック・グループが異なる生態学的ゾーンを開発し、交換を通して相互依存の関係を保つ方式を基本にしているが、チャルワンカ谷の場合、その前者の方式はなく、後者の形はとっていても、相互依存の関係は弱まっている。わずかにプーナとキチュワ=スーニとの間に、完全な相互補完ではないが、

古くからの結びつきが残っているにすぎない。

2. Ayacucho 県 Parinacochas 郡

プキオから東へ行く道は、乾燥の強い山地を抜ける。灌木の林もところによってはあり、キヌワル (*Polylepis* sp.) の林などあるところをみると、スーニ地帯に入るとしてよかろう。人間の居住はなく、プキオとかチャビーニャ (Chaviña) など、少し下のキチュワ地帯の住民が薪とか木材用に灌木を利用するらしい。プキオから約 100 km, 5 時間の悪路の道のりを経て、海拔 3,060 m のコラコラ (Coracora) に着く。三方を山に囲まれた広い盆地状のなだらかな傾斜をもつ平坦地で、そこは太平洋に入るヤウカ (Yauca) 谷の源流地帯である。コラコラの町は碁盤目状の整然とした町並みをみせ、中央の広場に面して教会、市役所が配置され、非常に近代的な感じの町である。住民の大半はメスティーンで、町の外にひろがる牧場で牛を飼育している。この牛や乳製品は南海岸のナスカやそこを經由してリマの方に売られてゆくが、かつては一部がプーナの住民のリャマやロバの背に乗せられ、チャルワンカ方面にも運ばれたという。しかし、ヤウカ谷の方につながる自動車道ができ、プキオとコラコラも自動車で結ばれている今日、チャルワンカへ運ぶのはあまり得策でなく、最近では自動車を利用して海岸地方との取引きだけになってしまったらしい。

コラコラを出て盆地の端をまわりこむようにして南へ行くと、盆地のはずれにチュンピ (Chumpi) という小さな村がある。ここはコラコラとは対照的に、インディオ的色彩が濃いところで、村より下方にひろがる畑の耕作を行なっている。チュンピをすぎ小灌木の多い荒地を抜けると、前方にパリナコチャ (Parinacocha) 湖がみえてくる。直径 10 km 程の大塩湖で、湖岸には白い塩が堆積する。その手前は草地になっていて、牛の放牧場になっている。湖面はおよそ海拔 3,270 m である。

湖の東北にインクーヨ (Incuyo) の町がある。この町の東側の斜面が畑になっていて、ジャガイモやトウモロコシを作る。そこは 3,200 m から 3,000 m くらいまでの斜面で、畑としてはあまり大きくない。ただ、この斜面をさらに東へ下るとパウサ (Pausa) の谷に入る。そこはオコーニャ (Ocoña) 谷の上流の一支流で、谷間は温暖でオレンジなど柑橘類を産するという。パウサは海拔 2,500 m, 平坦な河岸段丘上にひろがる農地は、ほぼユンガ地帯の上限に入るものと思われる。そしてパウサはインクーヨを経て南海岸に自動車道でつながっている。

以上、チャビーニャ、コラコラ、インクーヨ、パウサの一带を、パリナコチャス郡としてまとめると、表 3 のような環境利用の図式が得られる。プーナは、プキオとチ

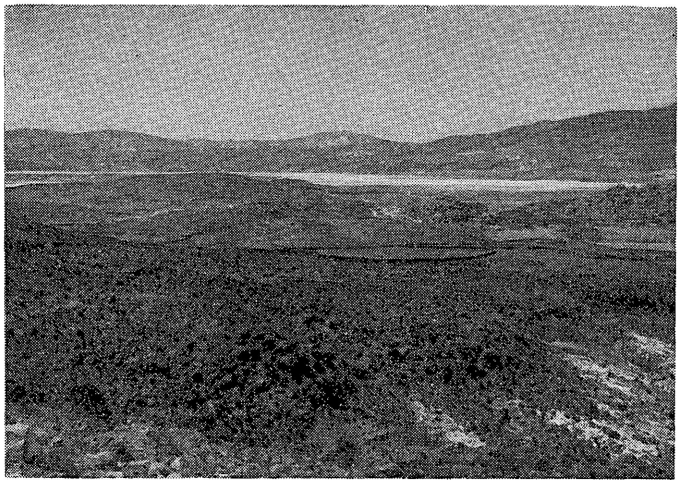


写真4 パリナコチャ湖

チャルワンカの間にひろがるものがコラコラやチャビーニャの地方にのびている。リヤマやアルパカの牧畜地帯であるが、牧民はプーナの北のチャルワンカやアンタバンバ、オコーニャ谷上流のコタワシなどに結びついていて、南のコラコラ方面とはあまり関係をもたないようである。コラコラ周辺のキチュワ地帯は、牛の牧場としてさかんに利用されているが、そのほかトウモロコシ、オオムギ、ジャガイモのための畑もある。パウサ方面のユンガ地帯は実際には目にしておらず、はっきりとしたことは言えないが、果実類は多くが換金用になっていると思われる。ただ、プーナの牧民の交易品のなかに乾燥果実がしばしば見出されるので、牧民との関係がみられるかもしれない。

チャビーニャとコラコラでは、町の郊外の小高い山上に遺跡がある。チャビーニャ

表3 パリナコチャス郡の環境利用

海 抜	環 境	生 業 と 経 済	主たる集落	環 境 利 用
4,000 m	プーナ	牧 畜：アルパカ、リヤマ	エスタンシアに分散	↑↓
3,800 m	スーニ			↑↓
2,800 m	キチュワ	牧 畜：ウシ 農 業：トウモロコシ、ジャガイモ、オオムギ	インクーヨ △ チュンピ △ コラコラ △	↑↓
2,600 m	ユンガ	農 業：果樹	パウサ	↑↓

△：遺 跡



写真5 サンケサンケ遺跡の小山

付近のアルトクワチャナ (Altoquhuachana), アンカスコチャ (Ancascocha), セレナパクチャ (Serenapaccha), コラコラ付近のサンケサンケ (Sanquesanque) その他である。またパリナコチャ湖のまわりにはいくつかあるらしいが実見する余裕がなかった。ここから山づたいに海岸へゆくと、チャラ (Chala) の町に出て、ケブラーダ・デ・ラ・バカ (Quebrada de la Vaca) の大遺跡やインカ王道がある。インカ帝国の伝承では、比較的早い時期にパリナコチャから南海岸への進出が行なわれたようで、コラコラのサンケサンケなどは、インカ帝国のそうした進出の拠点ともなった可能性がある。パリナコチャからコラコラおよび海岸地方のヤウカ谷の先史的調査は、インカ帝国の伝承とあわせて進めてみると興味深いのではなからうか。

3. Arequipa 県 Chuquibamba 谷

南ペルー最大にして、ペルー第二の都市アレキパから西へゆき、途中でパンアメリカン・ハイウェイをはなれて進むと、マヘス (Majes) 川に出る。道路がこの川を渡るあたりはすでに下流部で、河口まで 60 km くらいしかないところであるが、川の両側は切り立つ断崖を呈していて、谷幅は 1 km あるかないかといったせまさである。したがって、谷幅いっぱいに河礫のひろがる状態で、畑は幅のせまい河岸段丘や水のかぶらない谷底の平地を利用して作られている。これらの畑では、トウモロコシ、サトウキビ、コメなどを主に作り、バナナ、パパイヤその他暖地産の果樹も多い。10年前まではアシエンダ経営による農地であった。アプラオ (Aplao) の町を出て急坂を登ると、マヘス川の右岸の段丘上に出る。あたり全域が乾ききった砂漠であるが、



写真6 マヘス川下流

近年に至り灌漑工事を行なって、段丘上の平坦地の一部に水をひき、そこを緑野にして牛を飼いはじめた。海拔 1,000 m 程のところにあるこの人工の牧草地帯を横切ると、まさに一木一草ない砂漠と禿山で、そこに深い峡谷をえぐってチュキバンバの谷がある。この谷沿いに山道を登り、海拔 2,500 m あたりになると、両側の斜面がなだらかとなり、人家や畑がみえはじめ、やがて海拔 2,970 m のチュキバンバの町に着く。アレキパより約 250 km, 約 5 時間の道のりである。

チュキバンバの町は、同名の谷の源流部にあり、周囲三方は 4,000 m を越える山である。町とそのまわりの畑は、三方の山から落ちてくる斜面の上に乗る。畑には細い灌漑用の水路がはりめぐらされ、牧草を植えている畑が多く、水際や家屋まわりの木々が色濃い緑を添えて、美しい眺望の楽しめる谷間で、キチュワ地帯の典型ともい

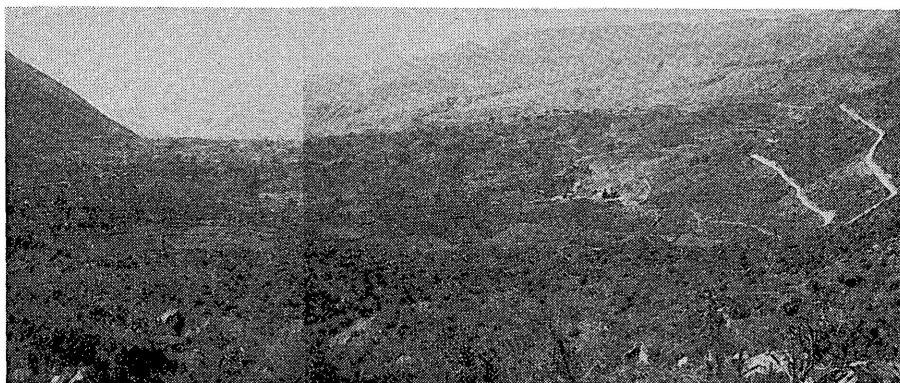


写真7 チュキバンバの町（中央やや右）と谷間

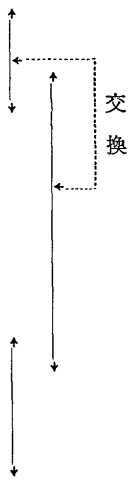
ってよいところである。牛を飼い牛乳を売りに出すほかに、畑ではトウモロコシ、オオムギ、ジャガイモを主作物としている。さらにアプラオの少し上の新しい緑野に土地を買い、牛を飼う者もいる。

チュキバンバのまわりの山々は、その背後に広大なプーナ地帯をもっており、そこにはエスタンシアを構えた牧民がいる。チュキバンバの人びとは牧民達を「インディオシト」とよんでいる。牧民はリャマの背に薪を積んで町に下りてくることがあり、町の人びとはそれによびかけて必要なだけ薪を買う。売って得た金で牧民は自分達のほしいものを商店で買う。牛による収入があり、アレキパ方面とのつながりも強いので、町の人びとはあまりプーナに関心を示さない。またプーナの人びとも、大きなコロプナ山 (6,425 m) の南側のせまいプーナよりも、その北側にひろがるプーナを重要視しているらしく、エスタンシアの分布は北側の方が多い。そして、そこからプーナづたいにクスコ県やアレキパ県カイヨマ (Cailloma) 郡そしてプーノ県と結びつく方を好んでいるらしい。ごく僅かな聞込みであるが、チュキバンバとプーナの関係は弱いようである。チュキバンバの北、コロプナ山にさらに近いところに、海拔およそ3,200 m の町パンパコルカ (Pampacolca) がある。チュキバンバからの自動車道も通じているが、かなり山奥でチュキバンバより不便なところである。しかし、プーナとの結びつきはかなり強いようで、コタワシの方でとれる岩塩や牧民の産物は、プーナを通してこのパンパコルカに運ばれることが多いという。

このチュキバンバには、ハランプ (Jarampa) という名前の大きな遺跡がある。濃い赤色でよくみがいた地色の上に黒で文様を描く、いわゆるチュキバンバ様式の土器片を出すところである。遺跡のある丘の斜面には、階段畑の跡がたくさんあり、往時の繁栄ぶりを偲ばせる。丘の頂上付近には、使い古された石臼が何10個となく捨てられており、斜面に何10本もの平行の縞目を残す階段畑と共に、さかんな農業の行なわれていたことを物語る。

チュキバンバからコタワシ方面に通ずる道をとって町の背後の山を登りきると、海拔 4,000 m から 4,600 m の高さでひろがるプーナ地帯である。チュキバンバからおよそ1時間、道の左手の丘の中腹に遺跡がある。長方形の建物が多く、入口はほとんどが北側にあり、巨大なコロプナの雪山に向かっている。小灌木の多いところで、スーニとプーナの接点ともいえる。土器片はチュキバンバ様式ではなく、インカ様式に入るようにみえる。建物の数は判然としないが、少なくとも 300 m から 500 m くらいにわたって建物が分布し、小さな集落の規模にはなる。農耕は不可能であるから、家畜を飼う人びとの住むところという可能性はあるが、石造の立派な外観からすると、

表4 チュキバンバ谷の環境利用

海 抜	環 境	生 業 と 経 済	主たる集落	環 境 利 用
4,000 m	プーナ	牧 畜：リャマ，アルパ カ	△	
3,500 m	スーニ		無 人	
2,500 m	キチュワ	農 業：トウモロコシ， ジャガイモ，牧 草 牧 畜：ウシ 商 業	△ チュキバンバ	
1,000 m	ユンガ		無 人	
500 m		牧畜（ウシ）と牧草作り 農 業：コメ，トウモロ コシ，果樹，サ トウキビ	アプラオ	

△：遺 跡

特殊な行政上の機能をもつものであったろう。

チュキバンバ谷を中心に、隣接するプーナからアプラオまで含めて、その環境利用を概観すると、表4のようになる。プーナ、キチュワ、ユンガはそれぞれの住民の利用するところであるが、近年になってマヘス川の段丘に牧草地が作られ、そこに土地を所有したためにキチュワとユンガの両方を利用する者がチュキバンバの町に現われた。しかし、この異なる生態学的ゾーンの利用は、少数の限られた者によって行なわれているもので、その目的は乳牛ならびに食肉牛の飼育であり、市場経済に直結した産業で、アンタバンバの牛飼育と同じ性格をもつ。

4. Arequipa 県 Cotahuasi 谷

チュキバンバから北西へ、コロプナ山の南側を巻くようにプーナ地帯をゆくと、オコーニャ谷上流のコタワシ谷に入る。コタワシ谷も南ペルーの西斜面の河川の例にもれず、両側は高い断崖の様相を呈する。プーナはなだらかな起伏の連続であるが、コタワシ谷はそこからおよそ 2,000 m も深く切りこんでいる。コタワシへの下り道は、アンデス高地有数の急峻な坂道である。プーナの端から眼下にコタワシの町が見下ろせるが、その急坂の上部は垂直な断崖にも等しく、灌木類が辛うじて生えるくらいで、人間の生活は不可能である。海拔 3,400 m のあたりからやや傾斜がゆるまるが、そ

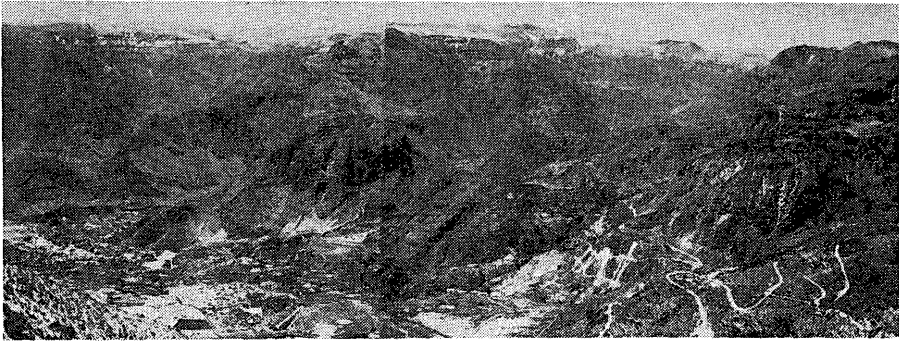


写真8 コタワシ谷。左端の谷底にコタワシの町がある

れと共に畑があらわれる。整然とした階段畑はなく、不規則な曲線状に石積みの土留壁をめぐらせた斜面畑である。コタワシの町は谷底の低い段丘の上にあり、海拔約2,700 m, 小さな雑貨商店が多く、住民は商業と農場経営を営む者が多い。

コタワシから上流は、両側の山の斜面が上端部を除くとややゆるやかになり、谷底の段丘と両側斜面に畑が作られている。谷底部分にはモリエ、レタマ、種々のサボテン、マゲイなどがよく生え、空気も暖かいが、平均気温が20°C以上になる月はなく、ユンガを思わせる景観ではあっても、キチュワ地帯に入るとしてよい。コタワシではブドウやアンズを農場で作るが、パパイヤ、バナナ、ルクマ、パカエ、チリモヤなどユンガを代表する果樹がないことからしても、キチュワ地帯といってよい。換金用のブドウやアンズなどの果実のほかに、畑ではトウモロコシ、ジャガイモ、ソラマメ、オオムギなどを作るが、これらはほとんどが自家消費にあてられている。また小規模ながら牧草地もあり、牛が飼育される。アンタバンバの牛をコタワシに運び、そこで太らせてから市場に出すこともあるという。

コタワシから、上流部のアルカ (Alca) までの谷底部分は、このような農業が行なわれるが、住民のほとんどはメスティーンである。そして彼等は自分達はスペイン人であり、両側の山の斜面やプーナに住む人びと、すなわち谷底の人びとがいう「インディヘナ」とはまったくちがう種類の者であるという。つまり、斜面や高いところに住むのはインディオであり、谷底の住民は「スペイン人」と自称するメスティーンもしくは白人系なのである。

アルカより上流部の谷間や斜面、およびコタワシ周辺の斜面には、大小の村があり、たしかに住民のほとんどはインディオのようである。斜面上の畑ではトウモロコシ、ジャガイモ、オオムギなどを中心に、自家用の農業を営んでいる。

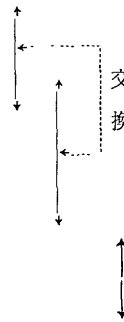
谷底と斜面はキチュワ地帯に入り、斜面の上方で一部スーニ地帯に入るであろうが、

コタワシ谷では、キチュワ地帯が2分され、下方は換金用果実栽培や牛の飼育を行ない、都市との結びつきがきわめて強い。一方、上半部の方は自給用の農業を営み、村人間の相互扶助の慣習やプーナの牧民との交換なども行なわれている。アルカよりさらに上流部にも農村が点在するが、それより上のプーナは牧畜地帯でリャマとアルパカが数多く飼育される。この地方を現在調査中の稲村哲也によれば、牧民の交易や交換活動はかなり旺盛で、アンタバンバ、クスコ県、アレキープ県カイヨマ郡などとの交流が行なわれているという。

コタワシ谷の環境利用は表5のようにまとめることができるが、プーナの住民と谷間の住民との間には、つい10年位前まではかなり密接な関係があったようである。プーナの住民はリャマという運搬手段の使い手で、谷底や斜面の農民のところで収穫時に作物を運搬する仕事を担当した。その他、獣毛や乾肉などを持ってきて、農作物と交換したり、商品を買って帰ったという。コタワシの近くには、1年程前閉鎖になったが、ワルワ (Huarhua) というところに岩塩の鉱山があり、そこでとれる塩を牧民達はアンタバンバやパンパコルカなど、谷あいの村や町へ運んでいた。なお、プーナの牧畜は、コタワシなどに住む者の経営になる場合もある。その場合プーナの住民は家畜管理の仕事につく雇われ者で、報酬として家畜の一部を受けとっている。それでも彼等は代々プーナで生きてきたのであり、リャマとアルパカの扱いについては熟練している。家畜の所有者は町に住んで時折見廻りにゆく程度であるから、プーナの住民は、自己の所有になる家畜を飼育して、同時に農業地帯と接触を保って自活してゆかねばならない。

コタワシ谷のアルカあたりまでの谷間にはコヨタ (Coyota) という遺跡がある。コ

表5 コタワシ谷の環境利用

海 抜	環 境	生 業 と 経 済	主たる集落	環 境 利 用
4,000 m	プーナ	牧 畜：リャマ、アルパ カ	エスタンシアに 分散 △	
3,800 m	スーニ		無 人	
3,500 m		農 業：トウモロコシ、 ジャガイモ、オ ムギ	ワイナコタ タウリスマ	
3,000 m	キチュワ	農業と牧畜（ウシ）	アルカ コタワシ △	
2,500 m		果 樹：ブドウ、アンズ 商 業		

△：遺 跡

タワシの町の対岸の低い段丘上にある。粗石積ではあるが、3 m から 4 m に及ぶ高い壁を作り、部屋や広場を構成している。形はすべて長方形である。小さな小山群の間の窪地を利用し、遠くからは見えにくくなっており、建物は高い周壁の内側に集まっている。土器片はインカ様式らしいものが多いが、近くでワリ様式らしい土器片も数点見出された。チュキバンバの背後のプーナ地帯の遺跡の建物とよく似ており、やはりインカ時代の行政的機能をもつ建物かと思われる。なおコタワシ谷上流のプーナ地帯からスーニ地帯にかけて遺跡が多いということであるが、パイカの上方でコヨタによく似た建物の遺跡もある。この方は保存状態がよく、しかるべき調査が望まれる。

5. Moquegua 県 Puquina-Omate

アレキープから東方、海拔 3,000 m 前後の高さで山腹をほぼ水平に横切る自動車道は、プキーナを経てオマテに通じている。プキーナはじめその東西にある小村は、ピチュピチュ (Pichupichu) という海拔 5,664 m の山の南斜面に位置して、一般に乾燥の度が強い。アンデス山脈の奥ではなく、むしろ西端に近い独立峰の斜面であるため、谷の水も乏しい。それでも小さな谷筋では、海拔 3,000 m あたりから下の部分に幅のせまい階段畑が作られている。ほとんどが乳牛用の牧草を植えている。

プキーナ地方の乳牛飼育は1947年以後のことで、近くのアレキープに大きな牛乳工場ができてからである。この牛乳会社は、1942年アレキープ市に工場を建設、同市の近郊をはじめ、プキーナ地方からさらに南のモケグア (Moquegua) 谷方面にまで乳牛飼育を奨励し、牛乳確保の営業政策を実施した。そのためアレキープ以南の諸河川

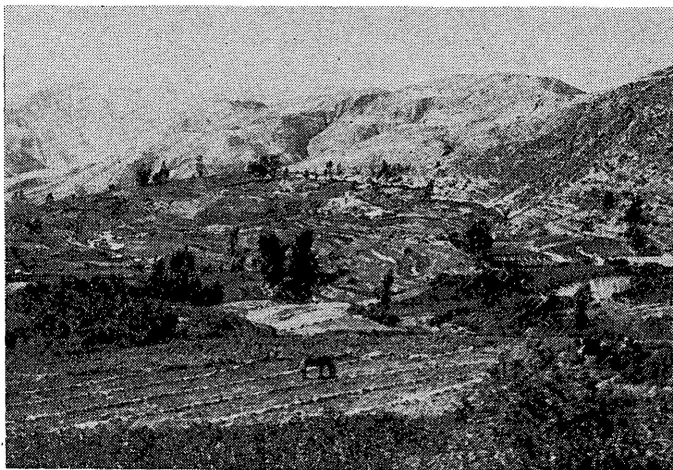


写真9 プキーナ付近の農地

の下流部は、ほとんど乳牛飼育地帯に変わってしまった。それ以前のプキーナ地方は、トウモロコシやジャガイモを作り、自給していた。遠くのプーナ地帯からも牧民がきて交換を行ない、またプキーナの人、良質のジャガイモの種芋を求めてチチカカ湖方面によく出かけたという。

プキーナをすぎてさらに東に進むと、道はタンボ川の谷間へと下る。そして海拔 2,300 m のコアラケ (Coalaque) の町を通り、2,200 m のオマテに着く。両側の山は茶色のひからびた土と岩ばかりで、谷底だけが緑である。コアラケとオマテでは、牧草と果樹を育てているが、すべて外部に売るためのもので、牛を飼わない。果樹にはオレンジなどもあり、家々の庭には、チリモヤ、パカエなども植えられて、ユンガ地帯の景観となっている。ごく最近までオマテには、プーナ県の牧民が下りてきて、果実類を入手して山に帰ったという。しかし、アレキパとのつながりが密接になり、乳牛用の牧草を作るようになり、さらにモケグア市への自動車道が開通するにおよんで、オマテと海岸低地の都市との結びつきは強まる一方である。後述するが、プーナ地帯の牧民の方にも、べつの変化が生じた事情もあって、オマテとプーナのつながりはもはやかつてのような緊密さはないようである。

途中散見した遺跡について若干述べておく。アレキパの東約 30 km のポクシ (Pocsi) 谷では、東側斜面下部に階段畑の跡がある。今日ではまったく乾燥して使用されていない。プキーナの町はずれの丘はベヤビスタ (Bellavista) とよばれ、丘の上はすべて遺跡である。石壁はほとんど崩されて、残るものはわずかであるが、土器片、石皿、バタン（平らな上面をもつ石臼用の大石）などが表面にちらばっている。プキーナを出て少し東にゆき、ラ・カピーヤ (La Capilla) への分岐点のところにあるマウカヤクタ (Maucallacta) の小山も遺跡で、たくさんのサボテンが生える。円形や方形の小部屋のような石壁遺構が乱雑に集まっている。これらの遺跡の時代や文化的系統は何ひとつ判っていないが、明らかにインカ様式の特徴をもつ土器も見出される。遺跡の多くは、3,000 m 前後の小山の上にある。

6. Moquegua 県 Moquegua 谷

モケグア谷は、アレキパから南へおよそ 200 km のところにある。この谷の水は東のプーナ県のプーナに端を発し、モケグア市の周囲にせまい平野を作ったのちに、100 km 近い峡谷となって太平洋に入る。モケグア市は海拔 1,400 m の谷底にあり、常夏の気候のもとで雨が少なく、周囲の山は砂漠の景観を呈する。ペルーの海岸低地に一般的な果樹のほとんどがモケグアにはあり、典型的な海岸ユンガといってよい。

モケグア市周辺の平地は、今日ほとんどが乳牛飼育の牧草地となっているが、トウモロコシをはじめ暖地向きの作物は何でもできる。谷をつめた東にはプーナ地帯がひろがり、チチカカ湖の方へつながっている。現在でも湖畔のプーナ市との交通は頻繁であるが、インカ帝国の時代には、チチカカ湖岸の住民がトウモロコシや棉作りにこのモケグアの谷間を利用していた。Murra の垂直列島論は、そのようなチチカカ湖畔住民の環境利用の形態に注目したところから生れたのである。

モケグア市近郊の牧草作りと牛の飼育は、最近まではアシエンダによる経営であったが、農業改革以来個人経営に変わった。牧畜と若干の農業に従事するのはメスティーソ達で、インディオの要素はほとんどない。

モケグア市の少し上流 25 km のところにトラタ (Torata) という町がある。このあたりまでの谷底部分は牧草地ばかりといってよい。例のアレキーパに大工場をもつ牛乳会社がミルクを確実に買ってくれるので、安定した収入が得られるのである。トラタをすぎると山の斜面がはじまり、道は登り坂となる。斜面部は乾燥が強く、ほとんど荒地である。海拔 3,000 m から 3,200 m のあたりで、プーナへ続く自動車道は、急な斜面上に作られた階段畑を横切ってゆく。そして道の右側の小山の上に、1 km 四方あまりにわたる石造建築の遺跡がひろがる。カマカ (Camaca) 山の西南麓にあるこの遺跡は、落ちていた土器片からしてインカ時代のものらしいが、そのまわりの壮大な階段畑と共に、少なくともインカ帝国のある時期に、大規模な農地開発がこのあたりで行なわれたことを物語る。今日ではまったくひからびた荒地でしかない。モケグアからトラタまでの谷間はユンガ地帯であるが、このカマカ遺跡のあたりはキチ



写真10 モケグア市近郊

ユワ地帯である。しかし、モケグア谷のキチュワ地帯は、今日無人の荒地と化している。

さらに高く進むと 4,000 m 台のプーナになる。ゆるやかな起伏がどこまでも続く草地のひろがりであるが、一部白い粗砂の砂漠もある。プーナの低いところには湿地が多く、アルパカの飼育には好適で、事実、このあたりのプーナはペルーでも有数のアルパカ飼育地方である。プーナ県の牧民は、アイマラ語系とケチュワ語系とに分かれる。どのあたりに境界があるのか判らないが、モケグア谷に下りてくる牧民の多くはアイマラ語系である。但し、たとえばパラティーア (Paratia) の牧民なども下りてくるので、ケチュワ語系もかなりいるとみなければならない [FLORES OCHOA 1968]。

プーナの住民がユンガ地帯のモケグア谷に下りてくることは少なくなったという。かつては農作業の時期を選んでかなりの数が下りてきて、作物の一部を入手して帰っていたそうであるが、低地の農業が換金経済に転ずることになって、プーナとの相互関係は切れてしまった。モケグアの市場には、ジャガイモ、ソラマメ、キノア、チューニョ（凍結乾燥ジャガイモ）など、高地産の食料がたくさん置いてあり、売っている女性は明らかにプーナやそれに近い高地出身の人びとである。高地と低地の関係は、直接的な相互関係ではなく、貨幣を媒介とする市場経済のなかの関係に変わっているのである。

モケグア谷の環境利用の形態は、表 6 のように要約することができる。先にカマカ遺跡を紹介したが、モケグアからおよそ 10 km 上流の谷間に、もうひとつトゥミラカ (Tumilaca) 遺跡がある。石積の家屋や墓、消耗のはげしい石臼と磨石などが見出される。さらにその近くに少なくとも 2 カ所似たような遺跡があり、土地の人はチンバ (Chimba) という名を与えている。

表 6 モケグア谷の環境利用

海 抜	環 境	生 業 と 経 済	主 たる 集 落	環 境 利 用
4,000 m	プーナ	牧 畜：アルパカ、リャマ	エスタンシアに分散	↑ ↓
3,500 m	スーナ		無 人	
2,500 m	キチュワ		無 人 △	
1,000 m	ユンガ	農 業：トウモロコシ 果 樹 牧畜（ウシ）と牧草作り	トラタ モケグア △	↑ ↓

△：遺 跡

Ⅵ. プーナの牧民

ペルー南部高地の環境利用の考察においては、プーナ地帯の牧畜を営む人びとを無視することができない。西斜面の谷間は、広大なプーナに隣接しており、牧民との関係は古くから密接であった。今回の調査はきわめて短期の表面的なものであったので、牧民と谷間の農民との接触する状況を把握することができなかったが、比較的最近まで牧民はよく谷間に下りてきていたようである。また現在でも牧民との関係が経済的に重要な役割を果たしている谷間の農村もあり、そうした関係は牧民の方がむしろ高く評価している面もある。ペルー南部のアンデス西斜面の環境利用を一般化する前に、少しく牧民のことを理解しておきたい。

最近南ペルーの牧民について、その経済、社会、儀礼等の諸側面への研究が増えてきて、南アンデスのプーナ地帯の牧民文化の理解が深まりつつある。そしてすべての研究者が一致して認めるところによれば、リャマとアルパカを飼育するプーナ地帯の牧民の生活は、プーナという自然に最もよく適応した動物を利用した、きわめて高い適応型であり、その歴史も古い。ここでは、彼等の経済活動特に農耕地帯との関係に着目してみる。

牧民とはいえ、高度との関係で牧畜専門の者から農耕を生業の一部にしている者までいて、牧畜と農耕の組合せの形は、場所によっていろいろである。Custred は、プーナを高低の2種類に分け、高プーナは徹底した家畜飼育専門であるが、低プーナではジャガイモ、オユコ、オカ、キノア、カニワ、ソラマメ、オオムギなどの栽培と家畜飼育の両方を営み、家畜と栽培の比重は、高さ、耕地に適する土地の大小等により、さまざまに異なるという [CUSTRED 1977: 77-78]。

牧民はプーナの自然に適応した家畜飼育を行なっているとしても、彼等の食料の多くは農産物である。リャマやアルパカの肉は食料になるとしても、毎日それを食べるわけにはゆかない。各世帯の所有する頭数はそれ程多くはなく、しかもアルパカの死亡率はかなり高く、草地の場所が限られていて、密度をたかめると損失の危険が増すのである。モケグア県の場合、中程度の牧民世帯は、最低200頭のリャマ、180頭のアルパカ、20頭のヒツジを持ち、最低限の経済的自立のためには、リャマ30頭、アルパカ15頭、ヒツジ10頭を必要とする [CUSTRED 1977: 70]。プーナ県のパラティーアでは、世帯平均約500頭のリャマとアルパカをもつ。少し以前では、その内約160頭がアルパカであった。しかしこれには非常に裕福な者とほとんど所有する家畜のない貧しい者も含むので、中程度の世帯の保有数は300~400頭であろうという [FLORES OCHOA 1977:

136-138]。アレキパ県カイヨマ郡のある地域では、600 km² の土地に112世帯が住み、アルパカ10,395頭、リャマ3,580頭、ヒツジ3,886頭、ウシ54頭、ウマ9頭を飼育し、世帯平均約93頭のアルパカ、約32頭のリャマ、約34頭のヒツジを所有することになる [CASAVARDE 1977: 174]。

牧民の食事は、ジャガイモ（チューニョを含む）、キノア、オカ、カニワ、コムギ、オオムギなどが主で、少量の肉（リャマ、アルパカ、ヒツジの生肉と乾肉）がそれに加わる [FLORES OCHOA 1968: 41]。家畜から牧民が得るものは、アルパカの毛が第一に重要で、つぎに肉と脂肪である。皮は細ひもや綱、サンダルに利用する。リャマは何よりも運搬用動物として飼育される。ヒツジは毛よりも肉用として飼われる。そのほかリャマとアルパカは、犠牲に供されることもある [FLORES OCHOA 1968: 93-96]。

アルパカ飼育に適したところは農耕の不可能なところが多く、いきおい牧民は何らかの形で農産物を入手しなければならない。その方法として第1に、自分達が農耕のできる土地を所有し、そこを耕作するという形がある。つまり、列島型か圧縮型の垂直統御である。しかし、西斜面ではこの型は見出せない。第2の方法は、農耕地帯との交換である。それは古くからの慣習に従って、農耕地帯の知人や擬制親族を相手の物々交換である。この点については、いくつかの事例が知られている [CUSTRED 1974; CASAVARDE 1977; FLORES OCHOA 1977a, 1977b]。第3に貨幣をなかだちにした交換がある。すなわち、プーナの産物を売ってユンガの谷間でブドウ、アンズ、イチヂクなどの乾燥果実を入手し、それをキチュワ地帯の農産物と交換しプーナにもって帰るというものである。第4に貨幣による購入という方法で、産物をプーナもしくはキチュワやユンガの商人に売り、得た金で必要なものを買うというもので、まったく市場経済の上に乗った方法である。第5に、これは第2の方法に加えることもできるかもしれないが、コタワシ谷の場合のように、農耕地帯で農作業の手伝いをし、その報酬に農作物を得るというやり方である。これはワヌコ県でも行なわれていることもある [FONSECA MARTEL 1972]。最後に興味深い方法がある。それは南ペルーの西斜面に特有な方法であるらしいが、海岸に下りてきて、コチャユーヨ (cochayuyo) という青海苔をとり、それを農民に売ったり、農作物と交換したりするものである [PEASE (ed.) 1977]。この問題については、本号の増田の論稿に詳しいのでそれを参照して頂きたい。

下方の土地から牧民が入手しなければならないのは食料だけではない。塩、砂糖、トウガラシなどの調味料のほか、石油、糸、利器、屋根用のトタン板、ロウソク、乾

電池、布、衣服、鍋、食器類等々、日用品の種類は日ましに多くなる一方である。衣服や食器、調理具など、そして住居は、昔なら自前で整えるか、伝統的な交換で最低限の必要を満たしていたのであろうが、次第に工業製品に依存することが多くなってきている。

こうして、牧民は結局プーナ地帯では自給自足できないことになる。おそらくプーナに住んで家畜を飼育した当初から、彼等は少なくとも食料の大半を農耕地帯に依存していたのであろう。それが今日では、食料以外の日用品も外に求めるようになってきている。それは、ペルーの国内および国外での産業化のいきおいに原因があるが、プーナ地帯のアルパカ毛は、すでに18世紀から商業資本の目をつけるところとなっていて、特に1830年代後半からイギリスの産業資本によるはたらきかけが急になった。この間の事情は Orlove の本にくわしい [ORLOVE 1977]。そして1950年代の自動車道路の建設があって、プーナ地帯の牧民は、アルパカの毛をプーナ地帯で売り、プーナ地帯に進出してきた商人を通して必要な品物を買うようになった。徒歩とリャマの背による運搬が、トラックを利用する運搬に代り、人びとの動く方向に変化が生じたり、移動の距離が大きくなることもあった。

しかし、すべての牧民がトラック道の途中に住むというわけではない。依然としてへんびな土地の多いのがプーナ地帯の特色である。牧民は、伝統的な物々交換から貨幣を媒介とした市場経済による交換まで、それぞれの土地の事情のもとに、農作物や工業製品を入手しなければならず、リャマの群を追って谷間まで歩いてくる場合も多い。Casaverde もいうように、牧民は海岸から東斜面の町まで広い範囲を動き、自分達に有利な形で必要な物品を入手しようとする。たとえばアレキパ県のカイヨマ郡のある牧民は、南海岸のカマナヤシワスの谷、マヘス上流のキチュワ地帯の谷間の諸村、そして東北のクスコ市を交換や交易の対象地にしている [CASAVARDE 1977]。プーノ県パラティーアの牧民は、東はチチカカ湖岸はもとより、ときにはその東のポリビア領まで足をのばし、東斜面低地で産するコカ、オレンジ、トウモロコシを入手する。南の方ではアレキパ、モケグア谷、プキーナ、オマテ、そしてマヘス谷上流に出かける [FLORES OCHOA 1968: 104-106]。

産業化のいきおいがプーナ地帯に及ぶのは19世紀後半で、ペルーの山地としては比較的早かった。プーナ地帯は、農耕地帯との相互関係を必須のものとしているが、産業化の進展によって、農耕地帯との関係は直接的である必要が減じた。しかしながら、自動車道路がプーナ地帯をくまなく走るということはないし、農民との関係は、市場経済の立場からすると不利な場合でも、不時のときの保障になることもあって、依然

表7 カイヨマ地方の牧民の交易（[CASAVERDE 1977: 179] に依る）

地 域	海 岸		山 間 の 谷 間（主に Colca 谷）			ク ス コ
訪ねる村や町	Sihuas	Camaná	Cabanaconde Tapay	Huanca Huambo Lluta	Coporaque Chivay Yanque Achoma, ほか	Paucartambo Yanaoca Ocongate Espinar, ほか
時 期	3-4月	2-4月	5-6月	5-6月	7-8月	8-10月
日 数(滞在日数)	15 (5)	8 (3)	10 (3)	12 (3)	8 (2)	40-60 (15-20)
旅 行 手 段	リ ャ マ	自 動 車	リ ャ マ	リ ャ マ	リ ャ マ	リ ャ マ
交易に提供する物品	肉	肉 貨 幣	肉, 毛, コチャユ ーヨ, 織物, パン, コカ, 糸, ほか	肉, 織物 (ポンチ ョ), ほか	肉, 毛, 織物, 皮 革, 労働, 糸, コ カ, 砂糖, ほか	イチデク, トウガ ラシ, コチャユー ヨ, 肉, 織物, リ ャマ, 貨幣, ほか
入 手 す る 物 品	イチデク トウモロコシ コムギ	イチデク トウガラシ コ メ	トウモロコシ 果 実	トウモロコシ コムギ オオムギ	オオムギ コムギ ソラマメ	チューニョ ジャガイモ ..
交 易 の 方 法	交換と購入	購 入	交 換	交 換	交 換	交換と購入

表8 パラティーア牧民の牧畜と交易

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
売 る も の	毛と皮			←————→									
	生 肉			プーノ県のプーナ、スーニ地帯 (Lampa, Juliaca, Cabanilla)									
交	入手するもの	イチヂク、リンゴ モモ						トウモロコシ ジャガイモ オオムギ	トウモロコシ ジャガイモ	オオム ギ コムギ			
易	入 手 地 方	モケグア県の谷間						アレキパ 県 プーノ県	アレキパ 県の谷間 ワンカの市	アレキパ 県 プーノ県			
牧 畜 活 動	畜群の移動	低いところの草地 雨 期				高いところの草地 乾 期							雨期
	家利 畜用	交配、毛の刈込み				屠殺、乾肉作り							

([FLORES OCHOA 1968: 92] の表を修正)

として維持されている例が多いのではなかろうか。ただ、変るのはプーナばかりでなく、農耕地帯も同様に産業化の波をかぶる。乳牛会社の政策で農耕地帯が牧場経営に変わってしまえば、プーナの住民は伝統的な交換方式を捨てて、別な方法で必要な食料を入手しなければならない。今日、両者の関係は急速な変化をしているようで、伝統的な関係に関する事例を記録にとどめておく必要は大きい。

VII. アンデス西斜面の環境利用の類型と歴史

南ペルーのアンデス西斜面は、アカリー谷からタクナ谷までのおよそ 600 km の長さにわたり、幅は河口から源頭のプーナ地帯までの少なくとも 250 km に達する。先述した通り、この西斜面のいくつかの河谷の上流部を観察したわけであるが、それをもとにできる範囲で、西斜面の環境利用の全体をまとめてみたらしどのようなことがいえるであろうか。以下、観察結果のまとめと私見を述べてみる。

まず第一に西斜面の環境からみてゆくと、諸河川の源頭部に広大なプーナ地帯が連続してひろがっている。このプーナは、アヤクチョ県から南へチチカカ湖を包みこみ、ボリビアからチリ、アルゼンチンの北部にまでひろがり、比較的なだらかで徒歩ならば往来が容易である。リャマとアルパカ、特にアルパカの飼育に適するため、この地帯には牧畜に専念する住民が多い。チチカカ湖岸やプーナの下限部では、ジャガイモはじめ寒冷の高地に適応した何種類かの作物づくりを、牧畜とあわせて行なう場合もある。1966年当時、南ペルーのアルパカはおよそ300万頭飼育されていた [ORLOVE

1977: 239 TABLE 19 より]。

プーナ地帯の下はキチュワ地帯といってもよいが、Pulgar Vidal は両者の間にスーニ地帯を設け、チチカカ湖岸の平野はスーニに入るとしている。ここを除くと、スーニ地帯は、西斜面を深くえぐる河谷のキチュワ地帯の上部に見出される。その多くは谷の両側の斜面がプーナにつながるあたりにあり、一般に傾斜が強く、チチカカ湖岸のような集約的な農業は行なわれていない。しばしば灌木の生える未耕地で、建築材や薪などの調達場所とされる。そして、キチュワ地帯とプーナ地帯の両方の住民が利用するが、接近の難易が所属を決めているようである。

キチュワ地帯は河谷の上流部の谷底や斜面にあって、どこでも灌漑をほどこしたり、規模の大きい階段畑を作ったりして、集約的な農耕や牧草栽培を行なっている。キチュワ地帯は谷に沿って細長くのび、源流部の方で盆地状にややひろがることが多い。かつては、最も重要にして集約的な食料生産地帯であったろうが、今日では牧場経営や牧草飼育の方がさかんになっていて、自給用の食料を生産するのは、源頭のせまい谷間とか、上流部の両側の急な斜面など、不利な場所が多い。

ユンガ地帯は、キチュワ地帯から少しはなれた、もっと下方の谷底に見出される。一般に、キチュワ地帯とユンガ地帯との間には、乾燥の強い無人地帯がはさまる。ユンガでは、バナナ、オレンジ、パパイヤ、サトウキビ、コメなど換金作物が大規模に作られる。トウモロコシにしても、自家用に供する必要量以上を生産し、外部へ売りさばく。また、モケグア谷からタクナ谷までの河谷では牧草づくりと乳牛飼育が中心である。

つぎにこれら環境間の関係についてみると、プーナ、キチュワ、ユンガの各地帯に、それぞれの環境開発を専業とする人びとが住み、異なる環境区分を二つ以上同じ人もしくはグループが利用することはない。別稿において、アンデス高地には、圧縮型、列島型、拡散型、専業型の4種類の環境利用の類型が想定できると述べたことがあるが[大貫 1978]、西斜面は少なくとも今回見た例についていえば、すべて専業型に入れることができる。専業型は、それぞれの環境区分を異なるエスニック・グループが利用し、区分間には交換のシステムがあって相互補完が成立するというものであった。エスニック・グループとして各区分の今日の住民をとらえることには問題があるが、プーナの牧民とキチュワの農民との間の通婚関係はほとんどないし、キチュワとユンガの住民間にも、日常的な社会関係はなく、それぞれの環境区分の住民は、たがいに異なる集団であると考えている。住民間に必要資源や物品の相互補完があるかという点、これもかつての形は失なわれ、市場を通しての入手という形が多くなってい

る。したがって、先に定義した專業型とは完全に一致しないが、各環境区分の住民がそれぞれ異なる集団に属するという帰属意識が強いことと、ひとつの環境区分内では自給自足できず、つねに他の区分の生産物を何らかの方法で入手して生活しているという点では、專業型の内容に一致するといつてよい。

同じキチュワ地帯の内部がさらにふたつに分かれて專業型になっている例がある。それはコタワシ谷の場合で、谷底の「スペイン人」と斜面の「インディヘナ」である。前者は牛の飼育や換金作物の栽培を行ない、後者は自給用の農業を行なう。両者の関係は、山間のキチュワ地帯と谷底のユンガ地帯との関係と同じ性質のものである。また、コラコラ周辺のように、コラコラの住民は牧畜を、その近くのチュンピの住民は自給用の農業を行なう例もある。コタワシの場合、キチュワ地帯を高度の差（斜面对谷底）で区分し、コラコラでは平面的な区分をしていることになる。ただ、コラコラの場合も多少の高低のちがいがあって、高いところの方に平地が広いので牧畜、低い方は斜面を利用したの農耕と、コタワシの高低区分が逆になっている傾向もみられる。

プーナ、キチュワ、ユンガの各專業者は、いろいろな方法で、他の環境からの産物を入手する。入手の方法は大別して2通りある。第1は交換であり、第2は貨幣による購入である。今日、自動車がいゝろゝな土地へ入るようになり、町や村に大小の商店が増えた。また、どこかで自動車道に出て、そこから先は自動車に乗って品物の売買にあたることもできるようになった。かくして、第2の購入という方法が多くなる一方である。

第1の方法は、伝統的といつてよく、先史時代からすでに行なわれていた。今日では、プーナ地帯とキチュワ地帯の間でのみ見出すことができるにすぎない。それも、自動車の入らない、へんぴな奥地に多く、自動車の通るところでは急速に消えつつある。たとえばオマテではつぎのような話がある。およそ50年前までは、「ランペーニョス」(プーナ県ランパ地方の人)がすばらしい土器とか、チューニョ、綱、ポンチョ、手織りの布地などをもってきたし、祭のときには踊り手や樂師を連れてきて家々をまわって歩いた。オマテの人びとはひきかえに果実やトウモロコシを与えた、といふ[FLORES OCHOA 1977b: 146]。しかしこれは50年も前の話として語られるところであつて、現在のオマテではもうみられない。それでも、プーナ地帯とキチュワ地帯の間の物々交換は、両者が近接し、しかも自動車の便の悪いところでは、まださかんに行なわれているようである[FLORES OCHOA (ed.) 1977; ALBERTI y MEYER (eds.) 1974]。

交換と購入との組合せ方式もある。プーナの牧民がユンガやキチュワの地帯でプー

ナの産物を金に変え、そこの特産物である乾燥果実などを購入し、キチュワやスーニの農産物と交換してプーナに帰るといった形である。先の牧民の項の表7や表8において、この種の交換がみられる。交換のレートは土地によってそれぞれ慣例があり、一般に市場価格とはずれがある。市場経済の支配が強まるにつれレートの変化も生じようし、一度貨幣価値に直した上で、交換が行なわれるようになるかもしれない。海岸のアティコ (Atico) 近くで、海際の岩場に小屋がけして海草 (コチャユーヨ) 採りをしていた男は、アレキパ県のカイヨマ地方の出身であったが、下りてくる高地民に海草の乾物を与え、代りにジャガイモやチューニョを入手する。その場合、海草の小さい塊1個を80ソーレス、大きい方を140ソーレスとし、ジャガイモ1kg 25ソーレスとして、等価で交換するという。この男は、海辺に住みつき、子供をカマナの町で学校に通わせ、水、トウモロコシその他をアティコの町で買っているの、貨幣で測る価値を交換の基準にしている。

労働を提供して農産物を入手する方法もある。すでに過去の話になったらしいが、コタワシでは、谷底や斜面での収穫時にリャマを連れた牧民が手伝いに下りてきて、報酬として農産物を受取っていた。そして市場経済下の労賃とはちがう基準で労働と報酬とが決められていた。これと似た形で海岸のアシエンダなどへの出稼ぎがあった。この場合は、市場経済の原則が優越する。かつては産物で支払われることもあったが、労働者と経営者との関係は基本的には市場経済の原理の上に成り立っている。

こうして、プーナ、キチュワ、ユンガの間には物資の交流があり、それによって各地帯の専業開発による生活が可能になっているわけであるが、物資を交流させる主役



写真11 アティコ付近の海岸に住む高地民の家

は、移動と輸送の手段の所有者である。伝統的な交換による方式の場合は、プーナの牧民である。市場経済の優勢なところでは商人で、トラックを所有する者とか、トラックを利用する者である。そして、トラックに輸送を依頼する者が圧倒的に多いから、輸送を担当する者はその町や村から遠くはなれたところを本拠地にする、農民にとってはやはりよそ者である。そこで、伝統的にせよそうでないにせよ、物資の交流にたずさわる者は、キチュワやユンガ地帯の農民にとってはよそ者ということになる。伝統的な交換が優勢なところほど、移動するのは牧民である。かつてはキチュワやユンガの農民がいて、それぞれの土地で生産を行なっても、自分達で動くことをせず、プーナの牧民の動きに依存していたのであろう。キチュワの農民にとって周囲のキチュワ地帯が自己の世界のすべてであった。プーナやユンガは異境である。その異境にいつもやすやすと出入りできるのは牧民である。自分達の世界にとって異境はタブーの領域である。そこを自由に動く人びとは、自分達とは異なる、タブーの制裁から解放されている人びとである。牧民が農民から特殊な儀礼的意味を付与されるひとつの理由は、こんなところにあるのではなかろうか。

今回の調査地はいずれも自動車道の通じているところである。多くはそれでも不便なところで、自動車でゆける限界にあったわけであるが、それでもすでに市場経済は支配的になっていた。西斜面の河川の源頭部には、自動車道の通じていないところが多く、そこはキチュワとプーナが接するところでもあり、今後伝統的な垂直統御の環境利用を調べるには、そこまで足をのばさねばなるまい。コタワシ谷のさらに上流のパンパマルカ (Pampamarca)、プイカ (Puica)、マヘス谷上流のパンパコルカ、同じくアンダワ (Andagua) 谷やコルカ (Colca) 谷、タンボ谷源頭のイチューニャ (Ichuña), などの調査が望まれる。

そのような自動車交通の便がないか、あるいはあっても極端に不便なところを除けば、プーナ、キチュワ、ユンガの環境区分帯間の伝統的な相互依存関係は弱くなっている。特にユンガ地帯はその関係の網目から完全に離脱している。その離脱はかなり古く、植民地時代にはじまったと考えられる。

西斜面の環境利用形態の変化については、それを知る手がかりがきわめて少ない。文化庁タクナ支所長の Luis Cavagnaro 氏によると、エスノヒストリーの面から若干の種族名や分布が明らかにされつつあるという。タクナ谷とサマ (Sama) 谷の場合、インカ帝国の支配よりも前に、海岸部に Changos, Cachalacos, Camanchecos などという人びとがいて、谷間には Uros とか Aymara など明らかに高地系とわかる人びとがいたらしい。しかし、それらの名前と系統をはっきりさせることはむずかしく、

むしろサマ谷からタクナ谷あたりのインカ帝国直前の住民は、アイマラ語系やウロス族系で、すべてチチカカ湖からプーナ県のプーナ地帯の出身者ではないかという。16世紀の記録では、インカ時代から16世紀中頃までチチカカ湖岸の住民がサマやモケグアの谷間に畑を作っていたとあり、それは Murra によって紹介されたと先述した。少なくともアレキパ以南の谷間低地（海岸ユンガとキチュワ地帯）では、プーナ県のプーナとスーニの地帯の住民が直接利用する、あの列島型の垂直統御が行なわれていたのであろう。海浜部には、イテ (Ite)、メカ (Meca)、ビラビラ (Vila Vila)、トモヨ (Tomoyo)、ボカ・デル・リオ (Boca del Río) などの遺跡があり、タクナ谷やサマ谷の谷間にも遺跡がある。また先に述べたようにモケグア谷にも大小の遺跡がある。これら谷間から海辺の遺跡やそこからの遺物と、チチカカ湖岸など高地のそれとを比較する考古学的研究が望まれるところである。それより北のアティコ谷までの部分については、ほとんど研究がなされていない。ただチュキバンバ様式のように、キチュワ地帯に大きな遺跡を築いた歴史があったことを想定するだけである。この文化がキチュワ地帯に本拠を置きつつ、下方のユンガとどのような関係をもったのか興味深い問題であるが、マヘス川下流での遺跡の所在は不明のままである。

西斜面の地形の特色を説明したときに、河川が河口まで深い峡谷をなして、海岸部に広い平野を作っていないと述べたが、それゆえにであろう、南ペルーの海岸部には人口の大きい強力な社会が成立しなかったようである。したがって、高地の人びとが直接的に利用できたのであろう。それに対して、ナスカ谷以北の河谷には、古くから農耕社会が確立しており、高地の社会とは緊張した関係の上に交流を保っていた。そして上流のユンガ地帯には、低地と高地の両方から接近が試みられ、衝突することもあった。リマ市の北のチョン (Chillón) 谷上流についての訴訟事件がその1例である [ROSTWOROWSKI 1977: 21-97]。

南ペルー西斜面の河谷上流のキチュワ地帯では、16世紀にはすでに専業型が強かったのではないと思われる。それ以前は列島型とか圧縮型もあったかもしれないが、インカ帝国の政策が専業型を促進したと思われるふしがある。1586年の *Visita* の記録によると、コタワシのほかにアチャンビ (Achambi) とトロ (Toro) という村があり、後の2村はインカに直属するヤナコナの住むところで、プーナに位置していたという。またアルカでは谷間で農耕をし、高いところで家畜を飼ったとある。しかし同時に、谷間に下りてくるインディオのいたことが記されていて、彼等はコタワシでトウモロコシ、コムギ、ガルバンソ（スペインから入ってきたマメ。 *Cicer arietinum*）、ジャガイモ、ブドウ、ブドウ酒を求め、アルカでは織物入手し、ユンガ地帯の谷間からト

ウガラシ、カマロン(川でとれるザリガニ)、棉などをもってきたという [JIMENEZ DE LA ESPADA 1965]。この動くインディオが牧民なのかどうか明らかでないが、コタワシあたりで飼うリャマは草が少なく育ちが悪いとあり、おそらくもっと飼育に適したところに住むリャマ飼い達とみられる。

当時コタワシやアルカには、2,300人の既婚の男子がいて、かなりの人口を擁していた。アルカでは谷底の方でトウモロコシとコムギ、斜面でジャガイモとキノアを作っていた。しかし、年代は不明だが、谷底部分はスペイン人やその子孫達に取られ、彼等のアシエンダになり、古くからの住民は斜面に押しこめられた。プーナ地帯の利用もできなくなり、牧民の専業的利用かアシエンダ経営になった。ユンガとはほぼ並行して、西斜面のキチュワ地帯とプーナ地帯の一部が、伝統的垂直統御のシステムから離脱していった。しかし、大半のキチュワとプーナは古い形で残った。

プーナ地帯は、1836年以後、主としてイギリス資本の進出により、国際経済に結びつけられてゆく。アルパカの毛の商品価値はたかまる一方で、20世紀初頭、クスコ県シクワニ(Sicuani)はアルパカ毛取引の中心となった。以後の大まかな経過については Orlove の研究から要約する。20世紀初め、シクワニには周辺のプーナ地帯からロバやリャマの背に担われて、アルパカの毛が運びこまれた。一方、農産物や工業製品も町にあふれ、活発な取引が行なわれた。アレキーパとは鉄道が通じ、物資の大量輸送が可能になっていた。鉄道は遠距離間の輸送に威力を発揮したが、沿線の外のプーナやキチュワ地帯は動物の力に頼らねばならなかった。しかし、農産物や獣毛の動きは頻繁だった。1930年代から1940年代において、道路建設が進み、トラック輸送が増していった。それと共に、交易範囲は広くなり、商人達も次第に奥地の方へ入りこんでゆく。

1945年から1955年にかけて、トラック輸送はついに鉄道を打負かした。鉄道より安い運賃の魅力は、人も物資もトラックの方へひきつけてしまった。それと共に、シクワニの日曜市だけでなく、多くの町で祭日にあわせて市が開かれるようになった。各町の政治的指導層も市の開催を奨励し、祭日の宣伝、交易商人へのよびかけなどを行なった。小さな町にも商店ができ、従来の消費生活の様式を変えていった。牧民による物資の移動の重要性は減じていった [ORLOVE 1977: 147-153]。

このようなプーナの動きと軌を一にするかのように、西斜面下部でも産業資本の活動が活発化した。アレキーパに牛乳会社が設立され、1950年代初頭にはアレキーパ以南のユンガ地帯は乳牛飼育に傾いていった。やがて影響はさらにキチュワ地帯にも及びだし、プーナ周辺やチュキバンバ谷が牛乳取引の網の目に組みこまれた。おそらく

く自動車道路はそれより少し早くから、主要河川の上流部のキチュワ地帯に入っていたであろう。それに沿って、プーナ地帯に入っていた商業も、徐々にキチュワ地帯に浸透していったことと思われる。そして、ユンガとキチュワの一部でも、牧民の移動に依存する必要性が減じたのである。

こうして、プーナ地帯の特殊性が西斜面の専業型垂直統御を生んだのであるが、その同じ特殊性が牧民から、各環境区分を相互に結びつける役割を奪ってゆき、垂直統御の運営の障害となった。しかし、下方にも垂直統御の重要性の減小に対応できる新しい道が同時に生れつつあった。すなわち乳牛飼育や牧草作りである。これによって、それまで牧民に依存していた部分を、市場経済に頼ることが可能になった。西斜面の垂直統御は、早い時期にユンガが離脱したにもかかわらず、人びとの生活にとって必要不可欠のシステムであった。しかし、19世紀末から20世紀前半にかけて、高低両方に垂直統御を必ずしも必要としなくてよい事情が生じ、垂直統御システムは崩壊の度をはやめたのであった。

VIII. 結 論

南ペルーのアンデス西斜面は、上方に広大なプーナ地帯をもち、そこから流れ落ちる河川は深い峡谷をえぐって太平洋に注ぐ。西斜面には大きな台地が海辺まで張り出しているため、河川は峡谷の形をとり、下流に大きな平野を作らなかった。したがって、下流部に大きな人口をもつ強力な社会が発展することなかった。このことは、高地の人びとが下流部の谷間にある、ややせまいユンガ地帯を直接的に利用する、いわゆる列島型の垂直統御を可能ならしめた。Murra の紹介したように、それは非常に規模の大きい垂直統御であった。

しかしながら、現在見る限り、西斜面の垂直統御は専業型が圧倒的である。特にマヘス川以北では、プーナ、キチュワ、ユンガの3区分がはっきりしており、キチュワ地帯の農業従事者の数が非常に多い。一方、タンボ、モケグア、サマの河川やアレキパ西南のプキーナ地方ではキチュワ地帯が小さく、モケグア谷のように、かつては大規模な開発が行なわれたが、今日まったくの荒地と化したところもある。西斜面には、専業型と列島型の2類型が16世紀当時に存在したのかもしれない。そういう歴史的側面、特に植民地時代の歴史については、今後の研究が少しずつ明らかにしてゆくことであろう。

今日、プーナ地帯は、依然としてラクダ科家畜の飼育がさかんである。南のプーナ

にはアイマラ語を話す牧民が、広いプーナの各所にエスタンシアを作って家畜飼育にあたっている。彼等は日常の食料に関して下方の農産物を必要としている。そのため、家畜から生れる特産物をもって、農産物と交換する。現在、物々交換は減少の方向にあり、牧民はいろいろな方法で現金を入手し、しかるのちに必要な食料その他を入手する傾向が強まっている。

プーナ地帯に獣毛産業が積極的に進出するのは19世紀後半以降で、20世紀中頃には自動車輸送が一般化した。それと共に、商業がプーナ地帯の奥深くまで浸透し、伝統的な交換によらなくても、必要物資を入手できる別の道が開かれた。

一方、キチュワ地帯には、海岸の都市社会に結びつく道があり、1950年代には牛乳会社の進出がさかんで、乳牛飼育や牧草栽培を専業とし、食料その他必要物資は市場を通して入手できるようになった。こうして、プーナとキチュワ双方で、伝統的な垂直統御に代る道が用意され、しかもほとんど同時にそれが進行したために、大きな混乱もなく垂直統御は弱められていった。

ユンガ地帯は、早くからスペイン人の手に落ちて、換金経済へと変っていた。すなわち、ユンガ地帯は早くから垂直統御のシステムから離脱していた。

しかしながら、垂直統御のシステムは、まったく消え去ったわけではない。今回の調査地域よりもさらに奥では、まだ昔日に比較できるような重要性を保ちつつけている可能性がある。また、ほとんど市場経済の支配下に入った地域でも、プーナの牧民が動いて、若干の食料や物資を流通させているところもある。西斜面の垂直統御の実態と歴史については、今後できるだけ早く調査と研究を進める必要がある。

垂直統御という用語は、Murra [1972] が提唱したもので、「生態学的ゾーンの差異を最大限に利用する」適応形態といえるが、Webster [1971] は、「多様な生態学的ゾーンの複合的開発」と定義する。そしてそれには、別稿で述べたように、いくつかの類型が想定でき、実際に機能している [大貫 1978]。今回広くみてまわった西斜面でも、高度や地形による生態学的条件の差異が、歴史的事情とあいまって、異なる生活様式を作りあげている。しかし、過去も現在も、アンデス高地の高度差利用をすべて垂直統御というには抵抗がある。

たとえば、高地の住民が低地に一時的に下りてきて、賃労働に従事し、そこで得た金で物資を買って高地に帰るような場合、あるいは低地の市場で物資を購入する場合、あるいは先述したアティコの海辺の海草採りのように、貨幣を価値の基準として物々交換を行なう場合、これらは、伝統的垂直統御の形ではない。あえて伝統的ということには意味がある。つまり、先スペイン期以来の垂直統御、そして今日へんぴな地域の物

々交換に支えられる垂直統御には、市場経済とは異なる原理が基礎にある。市場経済のなかでの物と物との交換はその場限りの1回で終るが、垂直統御のなかの交換は継続を前提としている。何世代にもわたる継続であることもある。交換のレートは市場価格とは無縁である。長い目でみれば、市場価格の変動が間接的な影響を与えて、レートの変更もあるだろうが、レートは一般にかなり長期間固定的であり、地方ごとに慣習化している。

そこで、垂直統御とは、先の Murra や Webster の定義に対して、異なる生態学的ゾーン間の交換は市場経済とは異なる慣習的基準による、という条件を追加したものとなる。ではその慣習的基準とは何であろうか。別稿 [大貫 1978] で紹介したように、たとえばチャウピワランガに明らかなように、異なる生態学的ゾーン間で行なわれる交換は互酬的慣習なのである。したがって、垂直統御システムのなかの交換は、市場経済の原理ではなく、互酬の原理に立脚している。それは、先スペイン期の社会的経済的諸関係の根底にある原理でもあり、それゆえに「伝統的」なのである。専業型や拡散型を垂直統御とする場合、伝統的垂直統御に限定しなければならない。異なる生態学的ゾーンを複合的に利用することは、アンデス独自の特徴ではない。もしそこにアンデス的なものを求めようとするならば、アンデスの社会関係の基底にあって、垂直統御をも成り立たせている互酬性に到達し、それを掘り下げてゆかねばならない。そしてその互酬性から、異なる生態学ゾーンの複合利用をとらえるとき、はじめて垂直統御のアンデス性が浮かびあがるのではあるまいか。

文 献

ALBERTI, Giorgio y Enrique MAYER (eds.)

1974 *Reciprocidad e intercambio en los Andes peruanos*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.

CASAVARDE R., Juvenal

1977 El trueque en la economía pastoril. In Flores Ochoa (ed.), *Pastores de puna*, pp. 171–191. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.

CUSTRED, Glynn

1974 Llameros y comercio interregional. In Alberti y Mayer (eds.), *Reciprocidad e intercambio en los Andes peruanos*, pp. 252–289. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.

1977 Las punas de los Andes Centrales. In Flores Ochoa (ed.), *Pastores de puna*, pp. 55–85. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.

FLORES OCHOA, Jorge A.

1968(1979) *Pastoralists of the Andes: The Alpaca Herders of Paratija*. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.

1977a Pastores de alpacas de los Andes. In Flores Ochoa (ed.), *Pastores de puna*, pp. 15–49. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.

1977b Pastoreo, tejido e intercambio. In Flores Ochoa (ed.), *Pastores de puna*, pp. 133–154.

- Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- FLORES OCHOA, J. A. (ed.)
 1977 *Pastores de puna*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- FONSECA MARTEL, César
 1972 La economía vertical y la economía de mercado en las comunidades alteñas del Perú.
 In Ortiz de Zúñiga (ed.), *Visita de la provincia de León de Huánuco en 1562*, Tomo II, pp.
 317-338. Universidad Nacional Hermilio Valdizán de Huánuco, Perú.
- JIMENEZ DE LA ESPADA, Marcos
 1965(1586) *Relaciones Geográficas de Indias*. Madrid.
- MURRA, John V.
 1972 El control vertical de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las comunidades
 andinas. In MURRA (1975), *Formaciones económicas y políticas del mundo andino*, pp. 59-
 115. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- 大貫良夫
 1978 「アンデス高地の環境利用——垂直統御をめぐる問題——」『国立民族学博物館研究報告』
 3(4) : 709-733。
- ORLOVE, Benjamin S.
 1977 *Alpacas, Sheep, and Men: The World Export and Regional Society in Southern Peru*. New
 York: Academic Press.
- ORTIZ DE ZUÑIGA, Inigo
 1972 *Visita de la provincia de León de Huánuco en 1562*, Tomo II. Universidad Nacional
 Hermilio Valdizán de Huánuco, Perú.
- PEASE, Franklin (ed.)
 1977 *Los Collaguas I*. Lima: Pontificia Universidad Católica.
- PULGAR VIDAL, Javier
 1946 *Las ocho regiones naturales del Perú*. Lima.
- ROSTWOROWSKI DE DIEZ CANSECO, María
 1977 *Etnia y sociedad: Costa peruana prehispánica*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- SOUKUP, Jaroslav
 1970 *Vocabulario de los nombres vulgares de la flora peruana*. Lima: Colegio Salesiano.
- WEBSTER, Steven
 1971 An Indigenous Quechua Community in Exploitation of Multiple Ecological Zones.
Actas y Memorias del XXXIX Congreso Internacional de Americanistas 3: 174-183. Lima.